

## 地域医療への想い



上川北部医師会  
名寄市立総合病院

酒井 博 司

この度、原稿の執筆依頼をいただいた時、私が目標とし、敬愛する医師である恩師が平成23年の新春随想に御年84歳で投稿された文章を思い出しました。

私は、子供の頃小児喘息を患い、小学校5年生までは、喘息発作によって、学校を休むことも多く、進級が危ぶまれる状態でした。私が生まれ育った所は、山奥の鉱山で人口が3,000人程の集落でしたが、当時そこに、内科、小児科、産婦人科、外科、整形外科などを一人でこなす医師がいました。今でいう、総合診療医です。喘息発作は夜間悪化することが多く、深夜、呼吸困難になり、子供心に死の恐怖を感じた時、白衣を着たそのスーパードクターが往診にきて、注射を一本打つと、呼吸ができるようになるのです。この体験は強烈で、私にとって、その医師は、命の恩人であり、憧れであり、やがて目標となりました。そして、医師を志す大きな動機となったのです。その先生は、鉱山が閉山となった後も、道北の地方病院に転勤し、総合医として活躍されました。88歳まで現役を通されましたが、私が現在の病院に赴任した後、体調を崩され、今度は、私が主治医として担当することになりました。医師となった私に、「お世話になるよ」と言って、嬉しそうに微笑んでおられた姿を今でも感慨深く思い出します。90歳で地域医療を支え続けた一生を終えるのですが、最期に主治医として関わられたことに不思議なご縁を感じています。

日本は、国民皆保険制度により、国民一人一人に良質な医療が提供され、世界一の長寿国となりました。この制度の理念は、貧富の差や住む場所の違いで受けられる医療に格差が生まれにくいことだと思います。しかし、現状は深刻で、地域医療は疲弊し、都会に比べ格差は大きくなる一方です。一人の医師を確保することすらままならない地方もどんどん増えています。医療は、電気、水道と同じく、人が住む上で必須のインフラ的要素です。地方創生が叫ばれていますが、地域医療の崩壊は地方創生にとっては致命的です。私は、山奥の過疎地で生まれましたが、幸い、そこに医師（恩師）がいて医療を受けられたから、命を繋ぐことができたと思っています。そのような経験もあって、私が生まれた翌年の1961年から始まった「いつでも」「どこでも」「誰でも」保健医療を受けられる国民皆保険制度の理念がこれからも守られること、それが私の変わらぬ願いとな

っています。

私が現在まで、15年間勤務している病院は、道北北部（上川北部、宗谷、留萌と遠紋二次医療圏の一部）の主に急性期医療を支える基幹病院です。この圏域は、医療資源が乏しく、広域で、まさに疲弊する地域医療の縮図といった地域です。その中で仕事は、正直、しんどいことも多々あります。しかし、先輩、後輩医師、コメディカルスタッフの中には、大変優秀で意識の高い医療人が、地域医療を守るため日夜奮闘しています。確かに地域医療にはさまざまな課題が山積していますが、志のある仲間がいる限り、課題は乗り越えられるものと信じ、これからも、同志と響働し、問題解決に向けて挑戦し続けていきたいと思っています。

最後に私が好きな高村光太郎の詩をそえて、筆を擱きたいと思います。

### 道程

僕の前に道はない  
僕の後ろに道は出来る  
ああ、自然よ  
父よ  
僕を一人立ちにさせた広大な父よ  
僕から目を離さないで守る事をせよ  
常に父の気魄を僕に充たせよ  
この遠い道程のため  
この遠い道程のため